

## おじいちゃんと笑顔

小六

私には大好きなおじいちゃんがい  
ます。おじいちゃんと旅行したり、  
遊園地に行ったりしました。小さい  
ころは、私の手をにぎりゆつくりと  
歩き、菜の花畑を散歩しました。そ  
こで、菜の花で作るかんむりを教え  
てくれたこともありました。また、  
編み物の手順を教えてくださいまし  
ていただきました。おじいちゃんと過  
ぎす時間は私にとって楽しく、安心  
できるものでした。

ところが、昨年の夏、おじいちゃん  
は家のトイレを出るところで転ん  
でしまって、こしの骨を折り、車い

すの生活になってしまいました。何  
度も手術をしているのに全くよくな  
らず、私が小さかったころのように  
歩くことができなくなりました。

リハビリをして、家に帰ってきた  
おじいちゃんは、以前の明るい笑顔  
とは少しちがっている気がしました。  
しかも、ベッドに横になっっている時  
間が多くなり、大好きだったお出か  
けだけでなく、近い所にも行けなく  
なっただけになりました。自分で自由  
に動けなくなってしまったおじいちゃん  
を見て、私はとても悲しくなりま  
した。

それと同時に、おじいちゃんにど  
う接したらよいかかわからなくなっ  
てしまい、少スキよりをとってしま  
ったこともありました。そんなとき、

お母さんが、

「おじいちゃん自身は何も変わって  
いないから大丈夫だよ。」

と私に言いました。

その言葉を聞いて、私ははっと  
しました。「おじいちゃんを『かわいそ  
う』と思う余り、無意識におじいち  
やんと私の心の間にかべを作ってい  
たのかもしれない。」

それから私は、少しずつ前と同じ  
ようにおじいちゃんに接するよう  
にしました。例えば、学校での楽し  
かった話やおもしろかった出来事を話  
したり、いっしょにテレビを観たり  
しました。最初は気まずいふんいき  
だったけれど、段々とおじいちゃん  
も笑顔を取りもどしてくれるよう  
になりました。

ある日、私が計算問題をすべて正

解したとき、おじいちゃんが、

「すごいなあ、昔のおれにそっくり  
だ。」

と笑って言うてくれました。私はそ  
のときのおじいちゃんの優しい笑顔  
を見て、お母さんの言葉を思い出し、  
「本当におじいちゃん自身は変わっ  
ていないんだ。」と心から安心しまし  
た。

それから私は、おじいちゃんので  
きることをいっしょに楽しむように  
心がけました。トランプをしたり、  
絵をかいたりすることで、私にとっ  
ておじいちゃんはとても大切な存在  
だのと改めて思いました。

今回の経験を通して、私は、「人の  
本当の大切さは、見た目やできるこ

とでは決まらない」ということを学びました。体が不自由になっても心は変わらない、むしろ支え合うことでおたがいのきずなはもっと強くなるのだと思いました。

これから私も私は、おじいちゃんといっしょにたくさん時間を過ごして、たくさん笑い合いたいです。そして、家の外でも困っている人や悲しんでいる人に自ら声をかけて支えることができる人になりたいと思います。

人と人が思いやりをもってつながっていくことが、きっと、だれにとっても生きやすい社会を作っていくのだと私は信じます。